4　鈴山遺跡（第２次）

１．はじめに

鈴山遺跡は、竹谷川上流右岸、鈴鹿山脈東麓の隆起扇状地の標高 92 m付近に位置し、三重郡菰野町字音羽に所在する。平成 19 年度に行われた分布調査では、石鏃や剥片を採取し、縄文時代の集落跡である可能性が考えられた。平成 25 年度に行われた確認調査では、縄文時代の土坑や竪穴住居と推定される遺構や縄文中期後葉の土器を確認した。本年度は 6,300 ㎡を対象とした発掘調査を行い、成果として縄文早期のほか、縄文中期後葉～末葉の遺構や遺物を検出した。

２．縄文早期の遺構

調査区北西部から南西部にかけて煙道付炉穴 10 基、集石炉２基を確認した。

（１）煙道付炉穴

単体で検出したものは２基で、その他は複数基が重複した状態で検出した。いずれも削平のため煙道天井部が残存するものはみられない。残存部は全長 1.6 m程で煙道が細くすぼまる形状を呈する。早期前半でも新しい時期のものと推定し、近隣では四日市市北山町に所在する中野山遺跡で検出したものと規模や形状が類似する[1]。

ＳＦ 60（写真 40）　調査区北西部で検出した。上部は削平され、本来の形状は不明である。残存部は全長 1.6 m程、幅 0.7 m程、深さ 0.1 m程を測る。煙道の前半部を中心に 7 cm 程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。遺物は検出されなかった。

写真 40　ＳＦ 60（北から）

写真 39　御在所岳を望む調査区全景（東から）

図 12　遺構平面図（1:600）

（2）集石炉

いずれも煙道付炉穴を切るように検出された。意図的に設置されたようにも見え、煙道付炉穴と大きな時期差がないと推定するが、詳細については不明である。

ＳＦ53（写真41・42）　調査区南西部で検出した。北側のＳＦ52（図14 押型文土器片を含む）と南側のＳＦ54、底面下のＳＦ99 計３基の煙道付炉穴を切っている。上部は削平されているが、平面形は楕円形を呈する。残存部は長径１ｍ程、短径0.95ｍ程、深さ0.2ｍ程を測る。埋土上層から下層にかけて拳大程の礫や５mm 程の炭化物が含まれ、一部の礫には被熱による赤変が認められた。厚さ５～６mm 程の縄文土器片（無文）を検出した。

３．縄文中期の遺構

竪穴住居８棟、掘立柱建物６棟、大型土坑２基、陥し穴（縄文中期土器を含む）７基を検出した。概ね標高の高い調査区西部に集中している。

（1）竪穴住居

残存の度合に差がみられた。壁周溝が残るものが２棟（ＳＨ50・84）、壁周溝は残らないが主柱穴と屋内炉が確認できるもの５棟（ＳＨ36・63・72・93・94）、主柱穴のみ確認できるもの１棟（ＳＨ95）を検出した。

ＳＨ50（写真43）　調査区南西部で検出した。東西4.1ｍ、南北4.1ｍを測り、平面形は円形より隅丸方形に近い。北勢地方の竪穴住居は中期に円形から隅丸方形に変化するとされる[2]が、当該遺構はまさにその過渡期の形状である。

平面プランは主柱穴を４隅に配し、最大幅0.8ｍの壁周溝が巡る。壁周溝は北側以外では二重になっていて、建て替えが行われたと推察される。壁周溝の外側には径0.2～0.25ｍ、深さ0.1ｍ程のピットを９基確認した。これらは屋根等を支える垂木穴と考えられる。

中央よりやや西よりに屋内炉を有し、主柱穴のうち東側二つは西側二つよりも柱間が広い特徴をもつ。また壁周溝の東辺中央付近に、出入り口の階段や梯子を支える支柱と想定されそうなピット（径0.2ｍ、深さ0.4ｍ）や、埋甕を配置したと推定

写真41　ＳＦ53 半裁（東から）

写真42　ＳＦ52（左下）・ＳＦ53（中）・ＳＦ54（右上）・ＳＦ99（ＳＦ53 底面下）（北西から）

写真43　ＳＨ50（東から）

写真44　ＳＨ84（北西から）

されるピットを検出した。これらのことから住居の出入り口は東側であると思われ、出入り口から炉までの空間をより広くとる意図がうかがえる。このような平面プランは県内では四日市市小牧南遺跡[3]に、岐阜県では宮之脇遺跡[4]・塚原遺跡[5]・炉畑遺跡[6]に類例がある。

床面の小さな凸凹は当該期の生活痕とみられる。埋土上層から床面直上にかけて、また小さな凹面からも縄文中期後葉の土器片や石鏃などの石器を確認した。

ＳＨ84（写真44）　調査区南西部で検出した。東西4.2 m、南北3.9 mで、平面形はやや東西に長い隅丸方形に近い形状を呈する。主柱穴を4隅に配し、屋内炉はやや中央より北西側に位置する。壁周溝は後世の攪乱により北東隅を削平されているが、四方に巡っていたと推察される。また、ＳＨ50のような壁周溝外側の垂木穴は確認できなかったが、壁周溝の北西辺で径0.1 m前後のピットが3基確認できた。これらはそれぞれ0.85 m間隔で並ぶため、壁柱穴と考えられる。床面では生活痕による凹凸が認められる。埋土からは多数の縄文中期後葉の土器片や打製石斧などの石器が出土した。

ＳＨ93　調査区南東部で検出した。壁周溝は残らないが、柱穴間がＳＨ50やＳＨ84と同規模の主柱穴と、中央からやや西寄りに位置する屋内炉とみられる被熱跡を確認したことから、本遺構を竪穴住居と推定した。主柱穴は西側に比べて東側がやや広がる特徴がある。調査区東端で唯一確認され、集落は東部にも広がる可能性を示唆する遺構である。

（２）掘立柱建物

県内における縄文時代の掘立柱建物は、松阪市王子広遺跡で後期のもの[7]が、鈴鹿市平田遺跡で晩期のもの[8]が、四日市市小牧南遺跡で中期のもの[9]が確認されていて、当遺跡での発見は4例目となる。

ＳＢ85・ＳＢ86・ＳＢ87（写真45・図13）　調査区北西部で検出した。3棟ともに妻側1間、桁側3間の長方形のプランで、妻側の全長は3.25～4.25 m程、桁側は最長で9 m程を測り、主軸は概ね東西を向く。柱穴の上部は削平されているが、平面形は楕円形を呈し、最大のもので長径1.4 m程、残存深0.5 m程を測る。柱穴Ａ・Ｂは2棟の柱穴が同じ位置で重複し柱穴Ａの底面には2穴の深度の違いによる段差がみられる。平面プランは北勢地方の弥生時代以降の掘立柱建物には認められない特徴を有する。

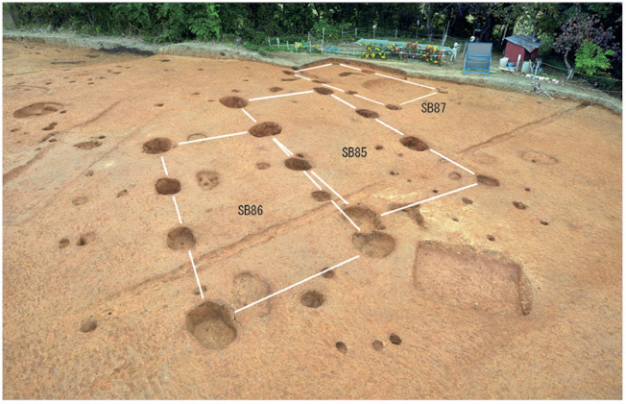

写真45　ＳＢ85・ＳＢ86・ＳＢ87（南東から）

また、ほぼ全ての柱穴から縄文中期末葉の土器片や石鏃、剥片を検出したため、現状では土器の示す時期に位置づけている。なお、3棟は接近していることから同時存在ではなく、建て替えもしくは時期差であることが予想される[30]。また、長方形の平面プランや竪穴住居の数が少ないことから、高床式の倉庫ではなく、平地式の住居であると推定される[31]。

当遺跡から東北東に7kmの盆野台地縁部に所在する小牧南遺跡でもほぼ同等規模の掘立柱建物を有している。小牧南遺跡で出土した一部の土器と様相が類似することから、同時期に存在していた可能性があり交流があったことが想起される。

ＳＢ88（写真46）・**ＳＢ89**・**ＳＢ105**（写真47）

調査区南西部で検出した。3棟ともに妻側1間、桁側2間の長方形のプランで、妻側の全長はいずれも3.5ｍ程、桁側は最長で5.5ｍ程を測り、主軸は概ね東西を向く。柱穴の上部は削平されているが、平面形は楕円形を呈する。ＳＢ89柱穴Ｃの長径は1.05ｍ程で残存深は0.4ｍ程を測り、底面には径0.3ｍ程

写真46　ＳＢ88（西から）

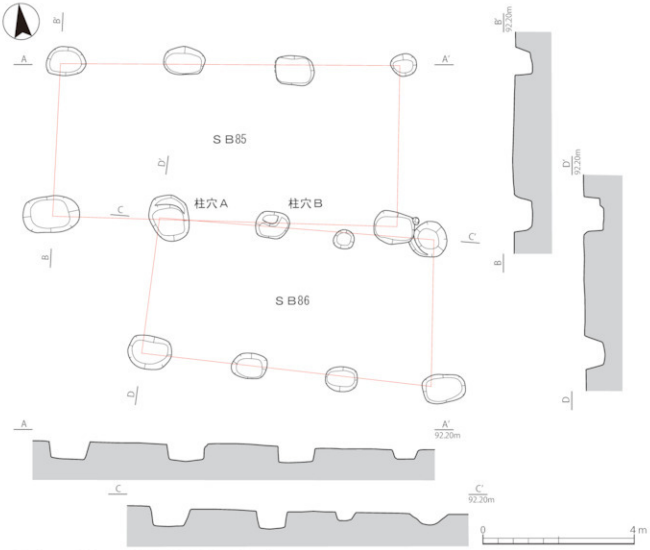

図13　ＳＢ85・ＳＢ86 平面図・断面図（1:100）

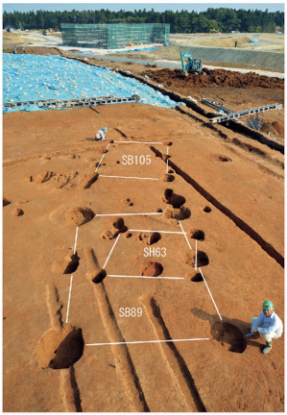

写真 47　ＳＢ 89・ＳＢ 105・ＳＨ 63（西から）

写真 48　ＳＢ 89 柱穴Ｃ柱痕跡（南から）

写真 49　ＳＢ 89 柱穴Ｄ土器出土状況（北から）

で黄褐色の柱痕跡（写真 48）がみられた。ＳＢ 89 柱穴Ｄでは上層から中層にかけて、縄文中期の深鉢片（口縁部や底部を含む）を一個体の 1/3 ほど検出した（写真 49）。

（３）陥し穴

調査区北西部から南西部にかけて検出した。削平により本来の形状は不明であるが、平面形は概ね楕円形を呈し、長径 0.8 ～ 1.4 m 程、残存深 0.5 ～ 0.9 m 程を測る。また、ＳＫ 61（写真 50）でみられるような底面中央に径 0.2 m 程の杭穴を有する。このようなプランは九州など西日本に類例がみられる[19]。

埋土から縄文中期後葉～末葉の土器片が出土していることから、現状では遺構の時期も当該期と推定している。ただし、居住域との時期の前後関係は今のところ不明である。

陥し穴の位置に関しては、調査区の西部に集中していること以外は読み取ることはできないが、地形が西から東に向かって徐々に低くなっていくことと、その関連性が示唆される。

陥し穴は通常、居住域と離れた場所を選んで作られる。また、獣道や獣を追い込みやすい谷地形に直線状にまとまった数を配置する追い込み猟のものと、単独または２～３基を獣道に配置する自動罠としての「待ち」の狩猟のものに大別される[19]。

今回確認した７基の中には、ＳＫ 68 → ＳＫ 59、ＳＫ 83 → ＳＫ 61 → ＳＫ 49 のように、南西から北東方向に一直線上に並ぶ２つのまとまりがみられる。地形や陥し穴の数、配置から考えると追い込み猟は考えにくく、獣道に配置した自動罠である可能性が優位に立つ。しかしながら仮説にすぎないため、遺構の性格を明らかにすることを検討課題としたい。

写真 50　ＳＫ 61（北西から）

4．縄文時代の出土遺物

煙道付炉穴、集石炉から微細な土器片がわずかであるが出土した。その中で煙道付炉穴ＳＦ52から押型文土器片を確認した。厚さは6mm程で外面に山形文を施している。他の土器片は外面に施文が認められず、押型文土器であるかどうかは不明である。

竪穴住居、掘立柱建物、大型土坑、陥し穴から出土した土器は、東海地方の編年では概ね神明式～山ノ神式[33]並行期のものが主体である。遺構別にみると竪穴住居からは立体装飾的なものなど取組式を中心とした前後の型式的特徴を有するものが含まれ、掘立柱建物柱穴から検出した山ノ神式並行期のものより古い可能性がある。岐阜県関市塚原遺跡[34]や岐阜県各務原市炉畑遺跡[35]などでみられる土器に類似し、当遺跡は美濃地方の強い影響下であったことがうかがえる。また、北白川Ｃ式Ｃ類大波状口縁部の様相と類似する土器片が確認でき、近畿地方の影響も及んでいたことが想定される。

縄文時代の石器は石鏃や剥片が多数出土したほか、打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石、石錘など数は少ないものの多種にわたって出土した。石鏃の石材はサヌカイトが大半を占め、その次にチャート、下呂石、黒曜石（信州産）の順に多い。また篩かけにより微細な剥片を多量に確認できたことから、遠方から石材を運びこの集落内で石器製作を行っていたことが推察できる。まだ整理中であるためさらに石鏃や剥片の点数が増えることが予想され、石器組成は礫石器よりも剥片石器の割合が高いといえよう。

5．まとめ

縄文早期や中期後葉から末葉の遺構が確認された結果、当該期の蒜野町所在地に集落が存在していたことが初めて明らかになった。集落は標高の高い調査区西部に集中し、さらに西部へ広がることが予想される。また、今回の調査では縄文時代以外の遺構が認められず縄文単一時期ということになる。

特に注目すべき成果の一つに掘立柱建物の発見が

写真51　石鏃・剥片
（右材：上から黒曜石・下呂石・チャート・サヌカイト）

写真 52　出土土器（1～5・14・15：ＳＨ 50、6～9：ＳＨ 84、10～13：ＳＢ 89、16：調査区東部攪乱内）

図 14　ＳＦ 52 出土押型文土器実測図（1:2）

ある。掘立柱建物を有する当該期の集落遺跡は県内でも稀有であるため、今回の発見は同遺構を有する集落および他の地域との関わりや文化の伝播を考える上で大きな手がかりとなろう。

また、土器様式や石器石材の流通からも東西地域との関わりがみられた。当該期の北勢の人々は、東西文化を受け入れつつも地域の独自文化を築いていったのであろう。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター 2014「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」

② 田村陽一 2005「縄文時代住居について」『三重県史資料編　考古 1』三重県

③ 第 3 章参照。

④ 吉田英敏 1994「宮之脇遺跡Ａ地点」「宮之脇遺跡Ｂ地点」『川合遺跡群』可児市教育委員会

⑤ 篠原英政・吉田英敏 1989『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会

⑥ 大江まさる 1973『炉畑遺跡発掘報告書』各務原市教育委員会

⑦ 松阪市教育委員会 1990『王子広遺跡発掘調査報告書』

⑧ 吉田隆史 2013『平田遺跡（第 19・22 次）－平田送水場改築に伴う発掘調査報告書－』鈴鹿市考古博物館

⑨ 前掲註①に同じ

⑩ 石井寛氏（元横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）のご教示による。

⑪ 前掲註⑩に同じ

⑫ 宮田栄二 2007「九州地方の陥し穴」『縄文時代の考古学 5　なりわい　食糧生産の技術』同成社

⑬ 大泰時統 2007「北日本の陥し穴」『縄文時代の考古学 5　なりわい　食糧生産の技術』同成社

⑭ 下記編年の 3 ～ 5 期にあたる。
綱細茂・高橋健太郎 2008「中宮式・神明式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

⑮ 前掲註⑤に同じ

⑯ 前掲註⑥に同じ

5　小社遺跡（第４次）

１．はじめに

小社遺跡は、鈴鹿市小社町に位置する遺跡で、鍋川に左岸の扇状地上に立地する。付近には東荒野遺跡や神戸遺跡、井領田遺跡などの遺物散布地のほか、鍋川を越えた西側には、次章の釜垣内遺跡がある。

これまでに２次および３次の調査を実施してきており、今回の４次調査で、当該遺跡の中央部の調査を終えることとなる。

２．遺構と遺物

（１）遺構

本調査区は２次調査の東辺と、３次調査Ｂ区の南東隅に接して設定される。

２次調査への隣接部分からは、攪乱土坑・攪乱溝のほか、引き続いてくる遺構は検出されなかった。３次調査Ｂ区との接点からは、溝ＳＤ 80とされた遺構の南辺を確認するに留まった。

ＮＲ 111　調査区南端部分で、川跡とみられる自然流路を確認して、延長が２次調査区へも続く土層が確認されたが、２次調査では認識されていないため、詳細が明らかとなっていない。今回検出した川跡は幅が約 2.4 m、検出延長約 11.2 mで、調査区南端で西へ屈曲することが明らかとなった。検出面から約45cmほど、3.0 ～ 5.0cm大の砕石混じりの砂利で埋まっており、砂利は北ほど厚く堆積していることがわかった。南半では黄灰シルトの堆積がわずかにみられた。この川跡の起点は、３次調査Ａ区で検出したＳＤ 31･37 といった溝と関係してくるものと思われ、２次調査を南進し、ＮＲ 111 を流れ鍋川へと合流したものと考えられる。

ＳＫ 115　この川跡の東岸において、埋甕を１基検出した。甕内部に川原石を充填して埋め殺した状況で出土したものである。土師質甕を、掘形の径約 95.0cm、深さ約 43.0cmほどをすり鉢状に掘りくぼめた中央に据え、周囲を細かい砂利で突き固める。２次・３次の集落域と考えられる地点からは川を隔てた東岸へ埋設されており、いわゆる甕形汲取式トイレの可能性が考えられる。土師質の特性からか、甕内部への石灰質沈着はみられないため、用途の特定は甕内土壌の分析をもって検討したい。

石列 112・113　部分的であるが石列を２箇所で確認できた。３次調査ＳＤ 32 やＳＺ 36 のように掘形両岸に並ぶ形状ではない。

写真 53　第４次調査区全景（南から）

図 15　第４次調査区遺構平面図（1:400）

（2）遺物

土師質甕　体部径約67cm、器高約60cmの素焼きの甕。中世以降、大型陶器の生産地である常滑では「下甕」と呼称する製品を生産しており、その特長を、「寸詰まりの砲弾の先端を裁ったようなものである。下甕の特長としては内端と呼ばれる口縁内側の突出がある。」とし[1]、この土師質甕の特徴に合致する。

火打金　残存長3.5cmの火打金片と思われる鉄製品が、ＳＺ112の石材の間ら出土した。錆化が著しい。

鍵　２次調査ＳＫ23で出土したもので、保存処理を経て錠前の鍵と判明したので概要を報告する。鉄製で「工」字形の鍵爪部を造り出し、先端に緑青を帯びる[2]。開錠部から紐通し孔を経て柄部までを一枚板で捻りあげ鍛接する。鍵爪部の形状から、腹式の板バネを持つ牡金具の錠前に対応する鍵である。錠前の県下出土例は、下郡遺跡、多気北畠氏館跡で報告されるが、鍵は鍵爪部まで完存する事例は少ない。

３．まとめ

４次調査では、建物跡や区画溝等はこのエリアには及んでいないこと、また鍋川へと南傾斜で緩やかに下がっていく地点において、集落中枢部からの排水機能を担った川跡など、集落の縁辺地における様相が明らかとなった。中世から近世にかけてどのような機能の推移を見せたかについても明らかにしていくことが今後の課題である。

［註］

① 大田区立郷土博物館 1997『関西地方における中世から近世への便所遺構』「トイレの考古学」

② 鉄製を最下位とし、金銅（銅）製、銀製とランク付けがあり、下位に位置付けられる鉄であるが、鉄の地板を銅板で被覆する錠前もある。錠前と鍵は同じ仕様で揃えることが多いことから、ＳＫ23出土鍵に対応する錠前も鉄地銅板貼であった可能性が高い。

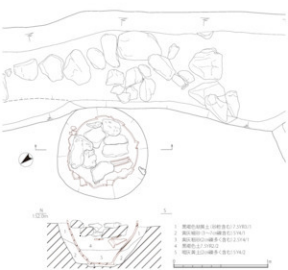

図16　ＳＫ115出土状況図（1:40）

写真54　ＳＫ115埋甕（北から）

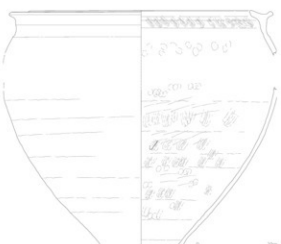

図17　ＳＫ115出土土師質甕実測図（1:10）

写真55　ＳＫ23出土鍵

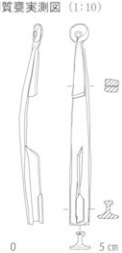

図18　出土鍵実測図（1:2）

図 19　第２次～４次調査区配置図（1:500）

6　釜垣内遺跡（第５次）

１．はじめに

釜垣内遺跡は、鈴鹿市小岐須町に位置する遺跡で、御幣川と鍋川に挟まれた扇状地上に立地する。付近には小岐須城跡・小社遺跡などの中・近世の遺跡がある。平成24年度に行った第２次調査および平成25年度に行った第４次では、鎌倉時代を中心とする集落があり、また集落の間に南へ向けて川が流れていることが明らかとなった[1]。今年度は第２次西調査区ならびに第４次西調査区と西・南辺に接するようにしてＧ区を、また第４次調査東区と北辺を接してＦ区の調査区を設けて3,644㎡の調査を行った。以下、過去の調査各地区を図20の地区名で記す。

２．遺構

（１）Ｆ区

本調査区はＥ区の南側に隣接する。Ｅ区で南西方向に南流してきた自然流路ＮＲ152を確認した。また、東岸はわずかな平坦部を見せるが、ゆるやかに東側の市道へ向けて下がる傾斜を見せており、Ｂ区で確認した屋敷地や土壙墓の集落域との間に、浅い凹地があったものと考えられる。東南隅は現代の水田面として開削されていたため、床土直下で柱穴等を確認した。また南端ではＮＲ152へ合流する東西方向の流路ＮＲ192が確認できた。一方の西岸は、北西隅の安定面にわずかに柱穴を検出したものの、遺構の密度は薄く、安定面以南は西からの自然流路がＮＲ152へ流れ込んでおり、地山が著しく洗われていた。

ＮＲ152　川幅約8.0～15.0ｍで、東西に氾濫域があり、氾濫域を含んだ川幅は幅約28ｍとなる。東西の法面は段が形成され、各段に不連続の溝状土坑を確

図20　調査区配置図

写真56　調査区全景（北東上空から）

認した。また、西岸では川岸の最上段にあたる面で、不整円形の川原石が詰まった石溜土坑ＳＫ193とその残骸ＳＫ195を確認した。これらの土坑については、後述する。川底は、地山が洗掘され、川幅中央は3.0～5.0cm大の円礫が厚く堆積して、中洲を形成しており、水量が減じた時には、中洲を除けて東西の法際に流れが分流した様子が明らかとなった。出土遺物は、氾濫域の川岸にあたる部分で山茶椀が、また川底の円礫直上に当たる層から灰釉陶器が出土するが、量は極めて少なく、Ｅ区のように完形の陶器類が出土することはなかった。

ＮＲ192　Ｆ区南東隅から西流して、南端中央で

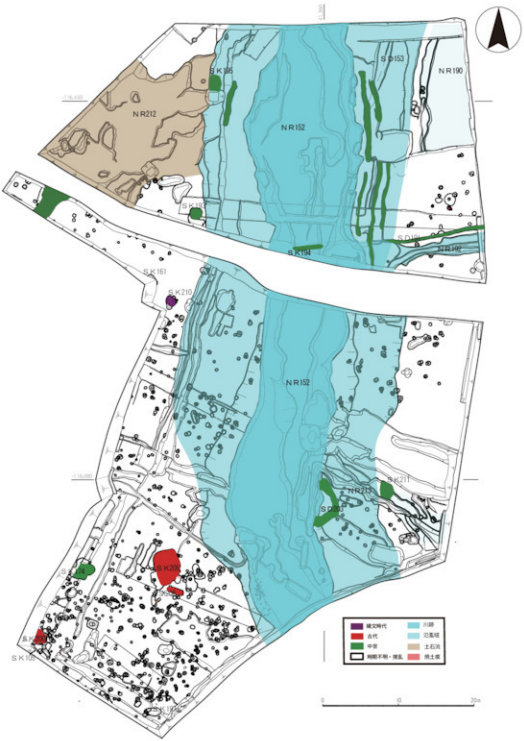

図21　第５次遺構平面図（1:500）

写真 57　石溜土坑ＳＫ 193（南西から）

写真 58　石溜土坑ＳＫ 194（南西から）

ＮＲ 152 へ合流する流路である。約 45.0cm下で東西溝ＳＤ 191 とＳＤ 190 が検出され、これらの東西溝が増水時に氾濫してできた流路と考えられる。

ＳＤ 191・192　ＮＲ 192 の下層で検出した東西溝である。ＳＤ 191 はＩＭ19 あたりで振り分け勾配となっていて、東勾配で東流する流れは、Ｅ区で検出したＳＤ 21 へ繋がる可能性があるが、市道下を調査していないため、確認できていない。一方、ＳＤ 192 の東延長は、Ｂ区の西壁面土層で確認されるものの、平面的に溝として検出されていないが、Ｂ区まで東進し、ＳＤ 21 の南を併走していたものとみられる。

ＮＲ 212　ＮＲ 152 の西岸で、ＮＲ 152 へ流れ込む、流路で、地山の土に多量の角礫を含んだ埋土である。所々に地山の削り残しを作り、出水時に一気にＮＲ 152 へ向かって流れ込んだ、小規模の土石流のような流れであったと思われる。

ＳＫ 193・194　ＳＫ 193 はＮＲ 152 の西岸で、ＳＫ 194 は同流路の埋没過程でＳＤ 192 に沿って敷設された石溜土坑である。ＳＫ 193 は東西 2.0 m、南北 1.8 mの不整円形に、ＳＫ 194 は幅 0.9 m、延長 3.7 m にわたって、10 ～ 25cm大の川原石が浅い掘り込みの中に充填されたような形状で検出された。Ｈ区で検出されたＳＫ 161・163・164 およびＦ区ＳＫ 195 やＧ区のＳＫ 211 も同様の石溜土坑とみられる。Ｈ区調査時には、不要石材を投棄した土坑と考えていたが、当該遺構が各流路の川岸の法面から岸沿線にかけて検出されることから、増水時の護岸や氾濫時の洗掘を防止するために設置した“蛇籠”的な水制敷材の残骸と考えられる。形状は、不整円形、長楕円形と一定ではないが、ＮＲ 152の東岸法面にみられる、不連続の溝状土坑も、石が検出されていないものの、こうした水制敷材の据え付け痕跡と考える。今回検出した石溜土坑からは、遺物の出土はなかった。

写真 59　土器埋設坑ＳＫ 210（北東から）

焼土 Pit　Ｆ区の二箇所で、焼土および炭化材を伴う Pit を確認した。いずれも検出面からの掘削深度は深く、底の方まで焼土塊と炭化材が入りこんでおり、ＮＲ 152 西岸のものからは、中世と思われる粗製の土師器皿が出土した。

（2）Ｇ区

Ｇ区では、Ｆ区からＮＲ 152 が引き続き南流して

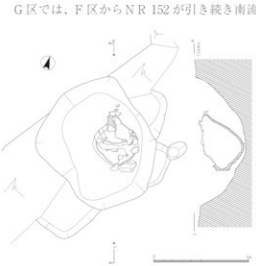

図 22　ＳＫ 210 出土状況図（1:40）

きており、G区南半あたりからやや東へ進路を曲げる様相を確認した。また屈曲手前で東からの流路が合流する。西半は比較的緩斜面の法面で西岸となり、柱穴が比較的多く検出される安定面であった。G区北東にも橙褐色粘質土の安定した地山はあるものの、柱穴等遺構密度は薄かった。また、H区北東隅との境界地点で、縄文時代の埋設土器を確認した。

ＳＫ210　一次調査の7トレンチおよびH区調査時に確認されていなかったもので、G区の柱穴掘削時に検出に至った縄文土器埋設土坑である。埋土は、検出面の黄灰シルトと非常に区別しにくく、黄灰シルトにやや灰褐色シルトの大まかなブロックが少量混じっていた。口縁部を北に横倒しとなって出土し、口縁部を覆う器物の遺存はなかった。縄文時代晩期の突帯文深鉢であり、土器棺であった可能性も考えられることから、土壌試料の分析を行って、埋設遺構の性格を明らかにしていきたい。

ＳＫ200　南西隅のH区との境界付近で確認した方形の土坑であるが、多数の柱穴等と重複しているため、形状が認識しづらい。焼土と炭に混じり、焼土硬化面直上で製塩土器、土師器甕、さらに製塩土器片下から炭化種子が出土している。

ＳＫ205　ＮＲ152の屈曲部西岸で検出した土坑である。炭化材は一部に約0.5ｍ四方の方形に残存する箇所もあり、出土遺物としては平安時代土師器杯が底面直上で確認したほか、埋土および上面から土師器長胴甕片、鉄滓（鉱滓）、灰釉陶器浄瓶の頸部片が出土している。焼土は土坑壁面寄りに集中してみられたが、カマド等の施設を確認できなかったこと、後世の柱穴は重複するものの、竪穴住居としての主柱穴を確認できなかったことから、焼土・炭化材を伴う土坑と判断した。

ＳＫ206　ＳＫ205の東隣にある、長楕円形の土坑である。一次調査の8トレンチの埋戻し埋土を掘削中に、曲刃鎌1点が出土した。遺構検出後、墓の可能性も考え半裁等を行い掘削したが、鎌以外の出土遺物および棺等の痕跡が見られなかった。

ＳＤ203　ＮＲ152がＮＲ213と合流する東岸で検出した弧状溝である。黒褐色の埴土で検出したが、5㎝下で暗褐色の小礫を含む砂であった。出土遺物は陶器瓶類小片で、中世の遺構と考えられる。溝の

写真60　ＳＤ203とＮＲ152・213（北東から）

形状及び検出時の埋土の状況から、弧状溝形水洗式トイレ遺構[7]とも考えられたため、土壌試料の採取を試みたが、砂礫層に阻まれ、採取できなかった。

焼土土坑・柱穴　G区南西部のＮＲ152西岸安定面で、焼土を伴う長楕円形の土坑ＳＫ196・197・202およびPitを検出したが、土器の共伴がなく、遺構の性格や詳細な時期は不明であるが、周辺遺構からは古代の土器類しか出土がないため、おおむね古代の遺構かと考えられる。

ＳＫ211　ＮＲ213の北岸で確認した石溜土坑である。F区のＳＫ193と同様不正円形に川原石が浅い掘り込みに充填された状況で検出されたが、石の残存はＳＫ193より密度が薄く、角礫がやや多く見受けられた。

これらの遺構のほか、多くの柱穴を検出していて、H区やＩ区の柱穴や掘立柱建物の延長も確認されているが、各調査区の製図と合成のうえ、改めて掘立柱建物の検討を行いたい。

3．遺物

縄文土器深鉢　晩期の突帯文深鉢で、口縁直下に2条の無刻目突帯と肩部に1条のＯ字刻み突帯を1条廻らす。鈴鹿市内では、上箕田遺跡、居敷遺跡、木田坂上遺跡、長者屋敷遺跡、加佐登遺跡での出土例があり、土器棺と考えられる事例が多い。本例についても、土壌の分析による用途の解明を行いたい。

石鏃　G区ＮＢ10pit 3の柱痕跡から出土したもので、柱材腐食後の流入土に混じり混入したものと考えられる。全長2.6㎝、一方の逆刺が剥離折損するがほぼ完形である。石材はサヌカイト製である。

曲刃鎌　G区で一次調査8トレンチの土坑上面から出土した鎌で、切先と基部の一部を欠損する。残存長15.0cm、幅2.9cm、刃厚は0.3cmである。

墨書土器　いずれも山茶椀の底部外面に記されたもので、「天」および記号とみられる墨書が観察できる。

灰釉陶器浄瓶　SK205上面で出土したもので、体部と尖台先端を欠く。残存長9.7cm、頸部内径1.8cm、尖台内径1.0cmで自然釉を多く受けており、緑灰色を呈する。猿投産の製品と考えられる。

SX76出土の副葬金属製品　平成24年度調査のB地区で出土した土壙墓副葬品で、平成25年度に保存処理を終え、形状等が明らかとなったため、新知見について概要を報告する。和鏡は直径10.8cm、厚0.17cm、細縁鏡Ⅰ類に分類[3]できる。鏡背を見ると、鈕は捩菊座、内区には鈕を挟んで対称に2羽の外向きの飛鳥を配し、伏せ籠を界圏を跨いで描く。外区には界圏にかけて萩とみられる草文を描写する。「網代双鳥鏡」[4]あるいは「伏籠双鳥鏡」[5]と呼ばれる構図となる。一方、鏡面には複数の織物痕跡があり、自然科学分析の結果、織物の染色および文様は検出できなかったものの、絹織物であることが明らかとなった。この鏡の銹の影響を受けて残った木質は、ヒノキ製であることがわかり、黒い被膜は漆塗であった可能性がある。鏡との銹着状況や材質から、この木質製品は鏡箱であったと思われる。この箱上に添えられた鉄製品は握り鋏と毛抜きで、鏡と併せて化粧道具の副葬事例と考えられる。握り鋏は出土時に不明鉄製品とされた棒状製品と接合し、残存長11.7cm、幅2.2cmまで復元できた。毛抜きは全長7.4cm、幅1.7cmでこの2点は鏡箱上蓋へ銹着する。また、鏡箱脇で出土した刀子は、刀身を欠損し、残存長8.5cmである。茎は柄の木質が良好に遺存する。これらの金属製品と共に出土した陶器椀・皿はⅥ形式の所属とみられるが、鏡の文様からみた製作年代は12世紀半ば～後半とみられ、陶器と約半世紀の差異があり、副葬者へ一世代伝世した可能性[6]が考えられる。

写真61　浄瓶

写真62　石鏃

4．まとめ

これまでの調査により、釜垣内遺跡の西半の様相が明らかとなった。

縄文時代の様相は、遺物を伴う遺構が非常に散漫にしか出現しなかったため、明らかではないが、後期から晩期にかけて生活の痕跡をわずかに確認できるとともに、5次調査のSK210へ埋設された深鉢の用途が明らかとなれば、西には石大神の頂を仰ぎ見ることのできる景勝地である当該地点が、集落にいてどのような位置づけであったかも明らかになるものと考えられる。古代では、川の西岸において平安時代を中心とした利用があり、掘立柱建物の検討と併せて、焼土土坑や製塩土器の分布等を総合的に考察する必要があろう。

中世には、川を挟んで存在した屋敷地と西岸掘立柱建物群が、水制対策や護岸敷設に苦慮しながら当該地で生活していたことが明らかとなった。

川の東岸にある屋敷地と墓域が、G区東岸の掘立柱建物とどのような関係にあったのか、また西岸の掘立柱建物群とどう関係したかを建物の検討を踏まえたうえで解明していく必要がある。同時に西岸では古代からの建物跡が展開している地点であるため、中世にかけてどのような推移を見せたかも明らかにしていくことが今後の課題といえる。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター 2014『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う文化財発掘調査概報Ⅳ』

② 蛇籠は、近世の農書『百姓伝記』に、土川や砂川では不適、石川に適性な水衝部や洗掘箇所の防御資材と記される。また、近隣の山本町郷土史には、近世に鍋川の氾濫に対して蛇籠による洪水対策を講じてきた歴史が紹介されており、近世以前もこうした川の護岸対策を行ってきた地域であったと考えられる。
　石崎正和 1987『蛇籠に関する歴史的考察』「第7回日本土木史研究発表会論文集」
　山本町郷土史研究会 2003『山本の昔いま』

③ 久保智康『中世・近世の鏡』日本の美術台 394号

④ 久保智康氏のご教示による。

⑤ 羽黒鏡の一面にほぼ同様の構図。
　人文書院 1970『古鏡』

⑥ ④に同じ。

図23　ＳＸ 76 副葬品実測図（1 ～ 11　1:4、12 ～ 16　1:2）

写真63　ＳＸ 76 和鏡

写真64　ＳＸ 76 鏡箱・鋏・毛抜き

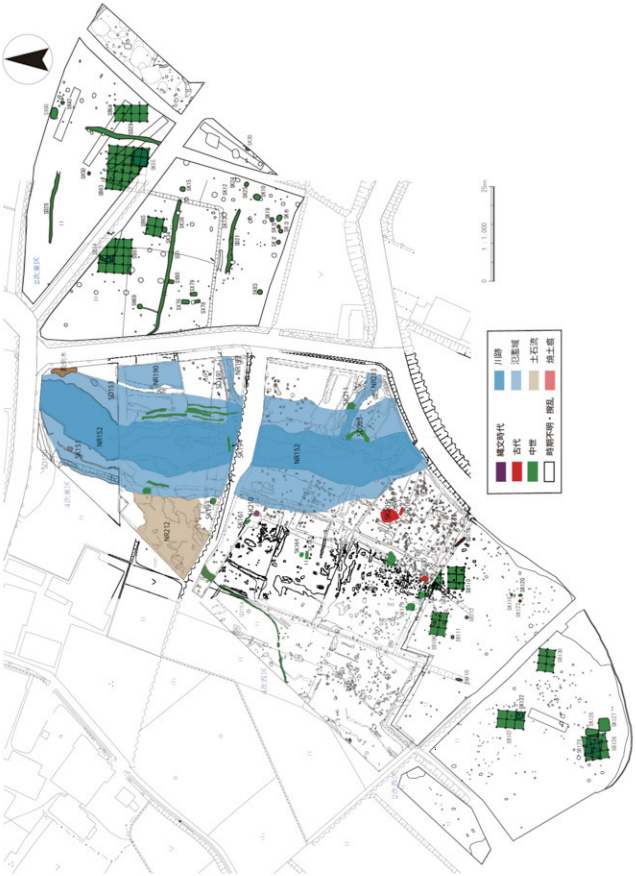

図 24　第２次～５次調査遺構図（1:1,000）

7　北山Ｃ遺跡（一次）

1．はじめに

北山Ｃ遺跡は、四日市市西大鐘町・北山町、桑名市志知にかけて所在し、四日市市北部を東流する朝明川の中流域左岸、標高 56 ～ 61 ｍの台地上に位置する。当遺跡は、昭和 50 ～ 60 年代に四日市市教育委員会によって行われた調査において、弥生時代後期と古墳時代後期の２時期にわたる集落跡が確認されていた[1]が、新名神高速道路事業に伴う調査によって、新たに古墳時代中期の古墳群も確認された。

2．調査の概要と結果

今回の調査は、現道（北山１号線）を拡幅し工事用道路とするために計画された範囲に、３×２ｍの調査坑（以下№）を 20 ｍピッチで 36 ヶ所設けて行った。当計画は、遺跡範囲の西端を概ね南北に縦断するため、北から南に向けて№１、№２とし、南端を№36 とした（図 25）。

調査の結果、概ね北端の基本土層は、表土、黄褐色土となり、中央部分から南端は、表土、褐色土、明褐色土となる。地山と判断した黄褐色土、明褐色土までの深さは、概ね 15 ～ 40cm である。遺構としては、溝を２条（№７・８）、ピットを６個（№９・18・23・27）、土坑を４基（№10・14・20・27）検出した。これらの遺構からは遺物が出土していないため、時期ははっきりしない。しかし、遺跡中央部付近で行われた過去の調査結果と、№７～ 27 にかけて遺構を検出したことから判断して、今回の調査区が、北山Ｃ遺跡の西端にあたると考えられる。

写真 65　調査坑№9（南から）

［註］

① 四日市市 1993『四日市市史』第三巻　資料編　考古Ⅱ

図 25　調査坑位置図（1:3,000）

8　高ノ瀬遺跡（一次）

1．はじめに

高ノ瀬遺跡は、鈴鹿市山本町字高ノ瀬に所在する。標高は、159 ～ 162 m、御幣川の支流である鍋川が形成する扇状地の扇端に位置する。現況は畑地、茶畑および宅地である。

鈴鹿ＰＡの建設工事の計画に伴い、平成 22 年度に分布調査を行った結果、灰釉陶器片や山茶椀片が広範囲にわたり採集されたため、新発見の遺跡として登録された。

2．調査の概要と結果

平成 24 年度と平成 26 年度の２か年、概ね遺跡範囲内の周囲を対象に一次調査を実施した。今年度の調査対象は、その中間に当たり、用地買収が完了した場所から、３回に分けて順次調査を行った。幅２ｍの調査坑を合計 14 本（Ｔ 30 ～ 43、計 848㎡）設定し、遺構、遺物の有無確認を行った。

調査の結果、事業地内の中央部から東側にかけて、表土下約１ｍの黒褐色粘質土（黒ボク）下で、安定した黄褐色シルト層を検出した。これまでの調査では、このような層は確認されていないため、遺構検出面と判断して精査したが、いずれの調査坑からも遺構は確認できず、遺物も土師器の小片が出土したに止まった。今回で、鈴鹿ＰＡの事業地内のすべての調査が終了したことになる。

写真 66　調査坑 36（西から）

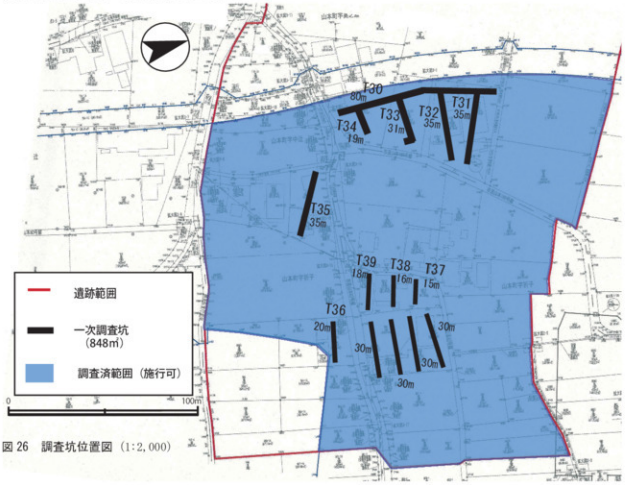

図 26　調査坑位置図（1:2,000）

報告書抄録

ふりがな	きんきじどうしゃどうなごやどうせん（よっかいちしちかいしくしょんのみやのまえにしかいくしょん）けんせつじぎょうにともなうまいそうぶんかざいはっぴょうこうりょうまいそうはっぽう　九七
書　　名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報VI
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	VI
編者者名	服部芳人・松永公喜・浅野陣司・谷口隆亮・宮崎久美・大川操・水橋公恵・中村法道・勝山孝文・西脇智広・村上央
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　ＴＥＬ　0596-52-1732
発行年月日	西暦2016（平成28）年10月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
北山Ｃ遺跡（きたやましーいせき）	桑名市志知（くわなししち）	24205 a	154	35°2′54″	136°36′13″	20150605～20151211	第６次調査 2,423	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業
	四日市市西大鳥町（よっかいちしにしおおとりちょう）	24202	241	35°2′47″	136°35′48″	20151019～20151022	一次調査 216	
小牧南遺跡（こまきみなみいせき）	四日市市小牧町（よっかいちしこまきちょう）	24202	568	35°2′31″	136°33′58″	20150605～20160118	第３次調査 5,935	
鈴山遺跡（すずやまいせき）	菰野町音羽（こものちょうおとわ）	24341	136	35°1′28″	136°29′52″	20150527～20151207	第２次調査 6,256	
高ノ瀬遺跡（たかのせいせき）	鈴鹿市山本町（すずかしやまもとちょう）	24207	1342	34°57′41″	136°27′48″	20150421～20150423	一次調査 400	
						20150707～20150709	一次調査 208	
						20151005～20151007	一次調査 240	
小社遺跡（こやしろいせき）	鈴鹿市小社町（すずかしこやしろちょう）	24207	1153	34°57′8″	136°27′24″	20160112～20160204	第４次調査 362	
釜垣内遺跡（かまがいういせき）	鈴鹿市小岐須町（すずかしおぎすちょう）	24207	1032	34°56′57″	136°27′10″	20150527～20151218	第５次調査 3,644	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北山Ｃ遺跡	散布地	古墳・弥生	古墳・土壙墓	須恵器（甕・ハソウ・杯など）・土師器（甕・高杯）	古墳は西山古墳として登録
小牧南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・中世	竪穴住居・掘立柱建物・埋設土器・集石炉・土坑・火葬墓	縄文土器・古式土師器（高杯・壺・甕・器台）、無紬陶器（山皿）、石器（石鏃・石斧・磨石・石皿・擂器）、砥石	
鈴山遺跡	集落跡	縄文	煙道付炉穴・集石炉・竪穴住居・掘立柱建物・大型土坑・落とし穴	縄文土器（中期）・石器・（石鏃・石斧・磨石・石錘）	
高ノ瀬遺跡	包蔵地	鎌倉	なし	土師器	
小社遺跡	集落跡	中世・近世	土坑・川跡・柱穴	土師器（皿・羽釜）、陶器、土師質甕	
釜垣内遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安・中世	土坑・溝・自然流路・石溜・掘立柱建物	縄文突帯深鉢・製塩土器・土師器・須恵器・山茶椀・灰紬陶器・黒色土器・炭化種子・鉄器・石鏃・砥石	

要約	【北山C遺跡】　桑名市南部を流れる員弁川の南岸、四日市市にかけて広がる丘陵上に位置する。今回の調査区は、第２次東区、第３、４、５次調査区の南端と隣接する。調査の結果、新たに８基の方墳と２基の円墳を確認した。墳丘は削平され、大半の古墳は周溝を残すのみであったが、１基で主体部が残存していた。他の古墳においても周溝埋土から５世紀代の須恵器と土師器が出土した。また、古墳時代の土壙墓２基と縄文時代の落とし穴２基を確認した。
	【北山C遺跡】　36箇所の調査坑を設けて調査を行った。その結果、概ね調査区の中央で、溝・ピット・土坑を確認した。遺物が出土しておらず、時期ははっきりしないが、昭和50～60年代に行われた発掘調査結果から判断する、遺跡範囲の西端に当たり、この当たりまで古墳時代の集落が存在すると判断した。　（一次調査）
	【小牧南遺跡】　今回の第３次調査では、現地は水田および畑地であり北に緩やかに傾斜する丘陵端部に形成された平坦面で調査を行った。確認できた主な遺構は、縄文時代中期の竪穴住居４棟・掘立柱建物３棟・埋設土器４基・集石炉１基、弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居21棟・掘立柱建物１棟、中世の土坑１基・火葬墓２基である。遺構検出面はシルト質が主体であるが、段丘礫が露出するような箇所も多くみられた。特に丘陵南西～西側は礫の包含率が高く、遺構もほとんど認められなかった。なお、縄文時代中期の掘立柱建物群は、現在確認されている県内最古の掘立柱建物となる。
	【鈴山遺跡】　三滝川上流北岸の音羽集落南側にある縄文時代の遺跡である。調査の結果、縄文時代早期の押型付炉穴９基、集石炉２基、縄文時代中期の竪穴住居８棟、掘立柱建物６棟、大型土坑２基のほか、陥し穴（縄文土器を含む）７基を確認した。なお、縄文時代中期の掘立柱建物群は県内最古であり、北勢地域における縄文時代中期の実情を知る上で重要な遺跡となる。遺物は、縄文時代中期の土器片や石鏃、石斧、石錘などが出土した。
	【高ノ瀬遺跡】　鈴鹿市山本町字高ノ瀬に位置し、扇状地の扇端、標高150～162mに位置する。幅２mの調査トレンチを14本（T30～T43）設定して行った。一部のトレンチでは、黒ボクの下で、安定した黄褐色シルトの遺構検出面を確認したが、遺構は検出されず、遺物も土師器小片が少量出土したにとどまる。　（一次調査）
	【小社遺跡】　鍋川北岸に位置する。現況は標高151～153mの北から南に向かって傾斜する扇状地に立地し、現況は畑地である。調査の結果、近世以降と考えられる石列や土坑（埋甕）・川跡・柱穴を確認した。遺物は土師器片（皿・羽釜）、常滑産陶器片（甕・鉢等）、および土師質甕が出土している。
	【釜垣内遺跡】　御幣川と鍋川に挟まれた、扇状地に立地する。標高は153m前後で、南東の御幣川方面に向かって緩やかに南傾する。調査の結果、４次東調査区で見つかった川跡の延長が、約75m検出され、４次東区から南流してきた川が調査区南端で緩やかに南東方向へ進路を変えることがわかった。この川の進路が変化した右岸には、多くの柱穴が検出されるとともに、焼土や炭を伴う土坑が複数確認された。これらの焼土土坑には製塩土器を共伴するものもある。縄文時代の石鏃が出土したほか、突帯文深鉢を埋納したとみられる土坑１基を確認している。

近畿自動車道名古屋神戸線

(四日市JCT～亀山西JCT) 建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ

2016(平成28)年10月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　株式会社アイプレーン